

◆2022年1月第3週の礼拝説教

■日時：2022年1月16日（日）

■場所：立川教会

■説教題：「生きるとは、キリストを生きる。」

■聖書：新約フィリピの信徒への手紙1：21-26（p362）

■讃美歌：17「聖なる主の美しさと」・505「歩ませてください」

お早うございます。

オミクロン株の感染が急激に拡大しています。

立川教会では、先週の役員会で、以前の確認事項について話し合いました。内容については、週報棚の「役員会報告」にありますので、後で目を通しておいて下さい。

まず、蔓延防止等重点措置が出された時ですが、礼拝はオンライン中心の礼拝に切り替わります。中国語礼拝も休止します。特に、公共交通機関を使われる方の出席は見合わせていただきますが、教会学校、ジュニア礼拝、夕礼拝、聖書研究・祈祷会は、人数が少ないので実施する予定です。

又、緊急事態宣言が発出された時は、聖書研究・祈祷会も休止します。

但し、今回のオミクロン株は感染力が非常に強いので、これまでの前例にこだわらず、役員とも相談しながら、随時臨機応変に対応したいと考えています。

それでは、今日から4回にわたってフィリピの信徒への手紙を学びたいと思います。

21節です。

21：わたしにとって、生きるとはキリストであり、死ぬことは利益なのです。

パウロは、獄中からこの手紙を書いています。

「生きるとはキリストである。」これはどのような意味でしょうか。

「生きるとはキリストである」と言うことは、キリストが私の内に生きていくということですが、先週の礼拝説教の主題で掲げましたように、パウロは、復活の主に出会ったその時

から、キリストの焼き印を押されている者、つまりキリストの奴隷となりました。つまり、パ

ウロの生はキリストのもの、キリストの所有であり、パウロにとって生きるのも死ぬのもキリストためであると言うのです。即ち、パウロの内にはキリストが生きておられる、生きているのは最早パウロではないと言うのです。

では、「死ぬことが利益」とは、どのような意味でしょうか。

キリストの奴隷となったパウロにとって、その使命を終えて死ぬことは、神様が支配されている国に招き入れられることを意味します。つまり、神の国に入れられることです。パウロにとって、それが全てでした。世における使命を終え、キリストが待っておられるところに行くことこそ、どれほどの喜びであったことでしょうか。パウロにとっての死とは、恐れどころか、待ち焦がれていることなのです。ですから、22 節以下の言葉が語られます。

22：けれども、肉において生き続ければ、実り多い働きができ、どちらを選ぶべきか、わ。

たしには分かりません。

実り多い働きとは、異邦人への伝道です。キリストの福音を宣べ伝えるために、神様はパウロを召し、使徒としての務めを与えました。パウロの3回にわたる伝道旅行によって、キリストの福音は当時知られていた世界各地へ伝えられ、世界宗教となる基礎が築かれました。

そのような比類ない宣教の務めを果たしつつも、パウロの心には二つの思いがあり、常に葛藤し続けていたのです。その思いとは、23 節です。

23：（生きるか死ぬか）この二つのことの間で、板挟みの状態です。一方では、この世を去って、キリストと共にいたいと熱望しており、この方がはるかに望ましい。

パウロのこの言葉を読んで、深い感慨に襲われます。

パウロにとって世を去る、つまり死ぬことは、神の国においてキリストと共にいることなのです。

皆さんは、キリストと共にいると言うことを考えたことがありますか？

すぐ隣りにキリストがいることです。

私のすぐ隣りにキリストがいることです。

パウロは、このキリストの実存を、「キリストと共にいたい」という言葉で言い表しました。

この世にあっては、聖霊によって知らされるキリストの実存ですが、神の国においては会い見える存在としてのキリストを語ります。

そして 24 節、世においてなお自分の使命は終わっていないことを告白します。

24：だが他方では、肉にとどまる方が、あなたがたのためにもっと必要です。

肉にとどまる。即ち、福音を宣べ伝え続けることです。今は、なお、世に留まって、福音を宣べ伝える務めが自分に残されていると言います。

25、26 節です。

25：こう確信していますから、あなたがたの信仰を深めて喜びをもたらすように、いつもあなたがた一同と共にいることになるでしょう。

26：そうなれば、わたしが再びあなたがたのもとに姿を見せるとき、キリスト・イエスに結ばれているというあなたがたの誇りは、わたしゆえにまし加わることとなります。

獄から解放されて自由の身を取り戻し、この手紙の宛先であるフィリピの信徒たちに再会出来た時の喜びと感謝の思いを語ります。

パウロは、獄に囚われの身となってもなお、自分が宣べ伝えた各地の教会の信徒たちに手紙を書き、その信仰を励まし続けました。

この手紙はその一つで、紀元 50 年代に書かれたと言われています。イエス様の十字架と復活の出来事があってからわずか 20 年後のことでした。

ところで、この手紙ですが、実は、今日読んだ箇所の前 12 節から 20 節で、驚くべきことが書かれています。18 節の言葉ですが、それだけ読んでもお分かりにならないと思いますので、12 節から 20 節までを読みます。前の頁の 361 頁です。

12：兄弟たち、わたしの身に起こったことが、かえって福音の前進に役立ったと知ってほしい。

13：つまり、わたしが監禁されているのはキリストのためであると、兵営全体、その他すべての人々に知れ渡り、

14：主に結ばれた兄弟たちの中で多くの者が、わたしの捕らわれているのを見て確信を得、恐れることなくますます勇敢に、御言葉を語るようになったのです。

注目すべきパウロの言葉はその次です。

15：キリストを宣べ伝えるのに、ねたみと争いの念にかられてする者もいれば、善意でする者もいます。

16：一方は、わたしが福音を弁明するために捕らわれているのを知って、愛の動機からそうするのですが、

17：他方は、自分の利益を求めて、獄中のわたしをいっそう苦しめようという不純な動機からキリストを告げ知らせているのです。

このような状況の置かれているパウロですが、その時に 18 節の言葉を語ります。即ち、

18：だが、それがなんであろう。口実であれ、真実であれ、とにかく、キリストが告げ知らされているのですから、わたしはそれを喜んでいます。これからも喜びます。

獄に囚われ、試練の中に置かれているパウロに対して、愛の気持からキリストを宣べ伝える者もいれば、全く反対に、自分の利益を求めて、獄中にあるパウロをいっそう苦しめようとする不純な動機からキリストを宣べ伝える者もいます。しかし、パウロはたとえ後者であっても喜んでいっていると言うのです。

これは、どういうことでしょうか。

私は考えざるを得ませんでした。

パウロを苦しめる、しかも獄中にいるパウロを苦しめるためにキリストを宣べ伝える者がいても、パウロはそれを喜ぶと言うのです。それどころか、19 節。

19：というのは、あなたがたの祈りと、イエス・キリストの霊の助けとによって、このことがわたしの救いになると知っているからです。

と言います。そして、20 節です。

20：そして、どんなことにも恥をかかず、これまでのように今も、生きるにも死ぬにも、わたしの身によってキリストが公然とあがめられるようにと切に願い、希望しています。

と述べるのです。

以上を読んで分かったことがあります。

疑問を感じた、自分の利益を求めて、獄中にいるパウロをいっそう苦しめようとする不純な動機からキリストを告げ知らせることもパウロが喜んでいる理由は、20 節にある「これまでのように今も、生きるにも死ぬにも、わたしの身によってキリストが公然とあがめられるようにと切に願い、希望している」と言うパウロの宣教姿勢から理解出来るのです。つまり、パウロは、間違っただ福音を宣べ伝える者に対しては妥協することはありませんでしたが、自分に対してどのような思いを持とうとも、例えば同じ宣教者であっても、自分に嫉妬する者、妬む者、そのようなことなど問題ではなく、ただキリストが宣べ伝えられさえすれば、「主イエス・キリストの霊の助けとによって」キリストが崇められ、私にとっても救いとなると信じていたのです。

このパウロの姿勢に、私は改めて学ばされました。

カトリックは、全世界で一つであるのに対し、プロテスタントは、聖書や聖礼典の理解において数限りなく教派が分かれます。しかし、キリストが正しく宣べ伝えられている限りにおいて、即ち主イエス・キリストの十字架における私たちの罪の贖いの死と、死を打ち破る甦りを信じる信仰において一致するならば、私たちは一つであることです。

今日の学びを通して、パウロのように、自分の生のすぐ隣りに死があり、その死においてもキリストの臨在を親しく覚える者になりたいと思います。

祈りましょう。